

柔道との出会い

小学校の時から、身長が高く体格のよいまさきは、よく中学生と間違えられていました。近所のおばさん達からは、

「まさき君は、がっちりした体格ねえ。」

「病気も逃げていくくらいだわ。おばさんとこの孫も、もっと食べてまさき君みたいになってほしいわ。」

と、会うたびに言われています。おばさん達は、うらやましく思っているのでしょうが、まさきにとっては体格のことを言われるのがうれしくはありません。と言うのもスポーツマンに見えるまさきですが、実際にはあまり運動ができるとは言えないからです。小学校の体力テストでは、握力、上体起こし等は、まあまあできたのですが、シヤトルランや五十メートル走、ハンドボール投げはさっぱりの結果でした。

「この体格がなあ……。」

まさきは中学生になりました。入学した中学校では、部活動は全員加入で、ほとんどの男子は運動部に入部しています。だから、部活動のことを考えるとゆううつではありません。体験入部期間は、一週間と決められています。文化部の活動にもいってみたいのですが、全く興味が湧きませんでした。とはいうものの、運動部となると足が止まり、どの部活ものぞくことができないのでした。

ある日、渡り廊下を歩いていると、上級生が声をかけてきました。三年生の柔道部の主将でした。

「君、部活は何にするか決めた？もしまだだったら、ぼくといっしょにこないか。」

気が乗らなかつたのですが、先輩の誘いだったので断ることはできず、しぶしぶ放課後の柔道部の見学に行きました。道場の扉を開けると、そこでは、先輩達が大声を張り上げ気合いのこもった練習をしていました。まさきは、先輩達のかげ声に圧倒されて、思わず、

「失礼します。」

と言って礼をしました。すると、どういうわけか先輩達の練習の手が止まり、みんなの視線がまさきに集まりました。驚いて、

「一年生の山田まさきです。お願いします。」

と、深々と頭を下げました。そこへ、柔道部の監督が近付いてきて、

「山田君か。君、いい声をしとるね。あいさつの仕方もいい。わしは、気に入った。体格もいいじゃないか。時間があるのなら、今日は、最後まで練習を見ていきなさい。」

監督にほめられたまさきは、ぼつと心の中が温かくなった気がしました。そして、



道場の端に正座し、先輩達の練習を見ていました。ちょうど練習試合が始まったところでした。先輩達は、互いにしっかりと礼をした後、両手を前に構え、相手をいかくするかのようにならな大きな声を出して、すきがあれば組もうと相手をにらみつけています。体育館の空気はぴんと張りつめています。二人とも百七十センチはありそうなくらい大きな中学生です。数秒後、一人の先輩が、もう一方の先輩の首もとをあっという間に両手で持ち、大外刈りで一本とつたのです。まさきの体に鳥肌が立ちました。



練習が終わり、みんなが集まると監督は、「柔道に限らずスポーツは、ただ勝てばよいというものではない。今日、体験入部に参加した山田君のように、はつきりした大きな声で挨拶をすることが大切だ。強くなるということは、体はもちろんだが、心もきたえるということだ。礼儀をつくすことのできる人間になってほしい。」と、部員たちに言いました。

(ぼくの大きな声？挨拶？今までそんなこと、考えてもみななかった。)

監督の意外な言葉を聞きながら、まさきは、自分の運動に対する思いが変化しているのを感じていました。

結局、まさきは体験入部期間の残り三日間を柔道部で過ごしました。大きな声であいさつをするのが気がすつきりするし、やる気もどんどんふくらんできます。受け身ばかりの練習でしたが、汗をかくことの気持ちよさを感じることもできました。その間、自分の運動に対するコンプレックスも和らいでいきました。そして、この柔道こそが、自分の持っているいいところを生かせることに気が付き、入部を決意したのでした。

柔道部での生活が始まりました。練習は基本ばかりです。「かかり稽古」では、投げたり投げられたりの連続ですが、痛さは不思議と感ずることがありませんでした。練習が楽しくて仕方ないのです。十一月には呉市体育館での柔道大会に初出場しました。その時には、惜しくも一回戦敗退でしたがまさきには、悔しい気持ちとすがすがしい気持ちとの二つがありました。それよりも、もつと強くなりたいという気持ちで日々の練習を重ねたのでした。



「おばさん、おはよう。」

「元気のいいあいさつ。気持ちがいいわ。」

「まさき君、また身長が伸びたんじゃないの。」

「柔道、やってるからね。」

今日もまさきは、近所のおばさん達に、明るく大きな声で挨拶をしながら登校しています。